

文学博士荒居英次君の「近世海産物貿易史の研究——中国向け

輸出貿易と海産物——」に対する授賞審査要旨

戦後わが国近世史の分野において、その研究が著しく進展したのは、社会経済史であつて、海外貿易史も亦先年来各方面にわたつて精緻な研究が発表されるようになった。しかし、これを国内史関係の諸研究に比すれば、研究者も未だ少なく、その業績の発表されるものも余り多くない。殊に中国貿易について見れば、その根本関係史料の彼我両国に残存するものが極めて少なく、その研究は一層立遅れているように思われる。

この間にあつて、本書の著者荒居英次君は、従来その個別的研究も、その総合的研究も余り行われていなかった近世中国向け主要輸出品である海産物貿易の研究に着手し、主としてオランダ国ハーグの国立中央文書館と、イギリスの公文書館のアッシュリッヂ別館保管所などに保存されている関係記録や文書類を精査して、中国船による海産物の輸出高の変遷とその事由を丹念に追及し、進んで輸出貿易全体の中に占める海産物の役割、地位を究明し、下つて開国後幕末期において、中国船に代つて進出してきた欧米船による中国向け中心の輸出貿易と、海産物貿易の実態とその歴史的な性格を解明している。

すなわち本書の内容は、これを二部に分ち、まず序論において従来近世中国向け海産物貿易史関係の諸研究を検討吟味して、その貿易について最大の課題は、海産物の輸出額や輸出数量高を逐年明らかにすること、このために欧

米側史料の吟味と利用を史料面の課題となし、さらに海産物貿易成立事情の解明、幕府の貿易諸政策や貿易商人の貿易仕法の改変に照応する貿易量の増減や、幕末期における中国船の後退と欧米船の進出、最後に近世海産物貿易の位置づけと性格規定など十項目の研究課題を想定して、著者の本研究に対する基本的な姿勢を明らかにしている。

そしてこれに立脚して、その本論の第一部中国向け輸出貿易における海産物の部は、これを江戸時代初期から幕末開国までを対象として五章三十節に分け各種の表九十九を挿入して詳論している。すなわち十七世紀末葉になり、特に台湾鄭氏が清朝に降服して、遷界令が撤廃されてから、来航中国船数が急増して、その主要輸出品銅の不足が著しくなった結果、貿易決済としての海産物の輸出が重要性を帯びてきたので、幕府は元禄十一年（一六九八年）に海産物貿易を規制して公貿易に切り替えた。ここに海産物と言うのは、煎海鼠、干鮑、饅舘などの俵物と、昆布を主とし、その他心天草、雞冠草、若布などの海藻類と鰯、干魚、干貝、鯉節などの乾物類とを指す諸色海産物のことで、既に十七世紀中葉から中国の市場、特に長江下流蘇・浙地域の需要の増大に応じて、輸出品種と数量に変化が生じてきて、下って宝永正徳年間には、海産物の輸出が全貿易額中二〇～三〇パーセントに上り、銅の四〇パーセントに次ぐ重要輸出品となった。尚他の輸出品は小間物などの諸色品、荒銅、丁銀の順で海産物より遙に少なくなっている。海産物の輸出数量では、俵物が全体の二〇～三〇パーセントで諸色海産物が七〇～八〇パーセントを占めていたことを明らかにしている。

ついで本書の中心をなす長崎俵物商人請方時代（延享二年・一七四五年―天明四年・一七八四年）と幕府直轄集荷時代（天明五年・一七八五年―天保十二年・一八四〇年）の二章については、貿易制度上の変遷と貿易の一般的動向、俵物、

諸色海産物の品種別の輸出高の推移、それぞれの全海産物における占有率、海産物全体が全貿易に占める比重などを、殆んど出島オランダ商館日記などのオランダ側の未刊史料によって、年次を逐って詳細な輸出表を作成して、これに基づいて綿密に検討追及している。この期の前半には、海産物貿易は概して順調に発展し、その輸出は全輸出高の五〇〜七〇パーセントを占め、銅の三〇〜五〇パーセントを凌駕して首位に立つようになった。その中諸色海産物の総高が八〇パーセントであるのに対し、俄物は二〇パーセントに止まっていた。尚その中一品種について見れば、例えば煎海鼠は俄物の八〇〜五〇パーセントに達し、他の干鮑、鱧鱒を圧倒して優位にたっていた。そして海産物の輸出総高は、大体毎年一五〇万斤乃至二五〇万斤前後に達していた。しかし後半期になると、全体の輸出不調が目立って、銅の輸出額も前半期にくらべ、次第に減退するが、文化末年頃から海産物の輸出も著しく減退して、その首位を銅にゆずる年が多くなったことを論証している。

つぎに本書の第二部幕末輸出貿易における海産物の部は、これを四章十節に分ち、各種の表五十六を挿入して詳論している。第一部に比して、この期の貿易に関する著書や論文は可なり多く発表されて、さらにその数量的考察にも及んでいるが、何れも貿易の全般的研究であって、特に海産物を対象としたものは少ない。著者はこれを一々吟味検討してその敍表の不備欠陥を指摘し、著者がイギリスなどで探訪し苦心作成した独自の敍表に基づき、全貿易中における海産物貿易の実態とその位置づけを行っている。安政六年（一八五九年）の開港後、幕末期貿易の様相が急激に変貌し、中国船に代って、新たにイギリス、アメリカ、プロシア、ロシア、フランス、オランダなど欧米諸国船が、日本と主として上海を中心とする中国間の貿易に登場し、特に貿易上断然他の諸国船を圧して進出したイギリス船が、

やはり中国向け重要輸出品なる海産物の大部分を取扱うようになった。この実情を、新たに開港した神奈川、長崎、箱館の三港について、それぞれ個別的に検討している。

この期の海産物貿易は、前代に引続いて幕府の直轄集荷が立て前であったが、この中特に倭物の売買取引の自由化が問題となって、駐日外交官はその自由化を強硬に要求した結果、ようやく幕末期も最後に近い慶応元年（一八六五年）になって完全な自由化が実現した。そして開港直後海産物の輸出は、長崎港では総輸出額の四六パーセントを占めていたが、翌々年になると代って生糸や茶が三六パーセントに上ってきて、海産物は一七パーセントに落ち、年と共にその比率は一層下降した。これに対し俵物や昆布の主要な生産地を擁する箱館では、開港直後すでに九一パーセントを占め、その後も常に高い比率を維持して、その主なる輸出港となった。この間神奈川（横浜）港では、海産物の輸出は開港直後一年だけ三五パーセントを占めたに過ぎず、その後は生糸の輸出が圧倒的に多く、その他茶などが主要な輸出品を占めていった。そして以上三港の輸出品全体に占める海産物の割合は安政六年度（一八五九年）には四〇パーセント近くであったが、年々下降して、ついに慶応元年度（一八六五年）には三パーセントになった。これに引換え生糸の占有率は万延元年（一八六〇年）に海産物を抜き、ついに八〇〜九〇パーセントに上り、茶はやや遅れて文久二年（一八六二年）にこれを追抜いている。結局幕末には海産物は、生糸・茶について第三位の輸出品に止ってはいたが、生糸や茶の輸出伸張率が、この期の総輸出の飛躍的な増加率を遙かに上廻ったのに対し、海産物の輸出は、この発展とは全く無関係で、幕末輸出貿易の全体的動向を規制するほどの力を持ち得なかったとしている。

本書の最大の特徴とする所は、前後一貫して近世中国貿易における主要輸出品海産物の輸出高について数量的考察

を試みて、これに基づいてその実態と動向を究明したことである。そのために著者は、オランダやイギリス側の史料を精査して、特に宝暦十三年（一七六三年）以降幕末期に至るまで、毎年中国船による海産物輸出高表を苦心作成し、俵物はもとより、諸色海産物中、その輸出高の極めて少量の品まで余す所なく、その数量と、その全体に対する割合、それぞれの輸出伸張率まで算定し、さらに中国船来航数や、一隻平均輸出高まで多数表示しているが、これは学界未開拓のもので、これによってその論ずる所は、極めて実証的で説得力に富んでいる。ここに、その先駆的な優れた研究方法に立って、近世海産物輸出貿易の実情とその推移は詳細に解明されて、今後この方面の研究に重要な基礎が据えられ、さらに広くわが一般貿易史や経済史の分野にも多大な貢献をなすものである。